

住居における環境の意味と役割

東アジアにおける「気」と「風水」の考え方を通して

李

桓*

Environmental Meanings and Functions of Houses
Case Study on a Philosophy of “Qi” and “Feng-shui” in East Asia

Li Huan

1. はじめに

環境時代における重要な取り組みである「環境教育」は、様々なレベルでの試みがなされ、2004年10月に法律⁽¹⁾が施行された。環境教育の目的は、環境に関する知識の取得のみならず、環境に対する関心、つまり「環境マインド」の育成にあり、そこで、山や海や河川や森のある自然豊かな場所が重要な体験場所となる。

本稿は、今まで環境教育にあまり取り上げられない「住居」について話題を提起し、環境マインドの形成にとって、住居の存在意味と役割を検討する。住居は最も身近な生活環境であり、人間の発達や心の形成に計り知れない役割があると考えられる。一方、似通った文化を有する東アジアの伝統居住からみると、自然との対話を大切にする住まい方が存在する⁽²⁾。その代表例は住居における「風水」⁽³⁾の重視である。風や水や地形などの自然の状況を「気」から読み取り、評価し、「風水」の良い場所に住居を定め、季節（節気）と関わりながら居住することがある。そこで、環境的にも風景的にも素晴らしい都市や村落や住居などは、歴史において人間と文化を育んできた⁽⁴⁾。したがって、環境マインドの形成を視野に、住居の意

味と役割を再発見することは意義がある。

本稿は中国の歴史における「気」の考え方、及び風水説における居住環境の影響の考え方を通して、「気」の環境観、及び住居を通じた環境対話のあり方を明らかにする。

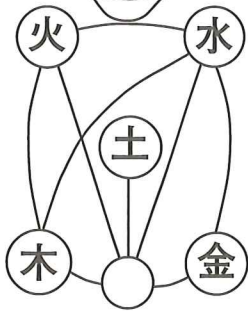
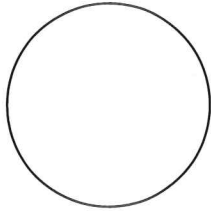
2. 「気」の思想にみる環境観

「気」の概念は、起源が非常に古く、現在の生活においては例えば「元気」、「氣勢」、「景気」などの言葉に見られるように、数え切れないほどの応用が見られる。風や雲や煙などの自然現象の捨象から来たと言われるこの概念は、世界認識の重要手段となり、天地万物の背後にある根本原理と見なされ、東アジアの世界観を特徴付けるものとなる。中国哲学的においては、天地万物の「もと」となる「気」は「元気」(Yuan Qi)という概念で説明されることもある。この言葉は日本において「元気」(Gen Ki)と発音し、人間の健康や心理的状況などを尋ねるときの最も日常的な挨拶用語となる。

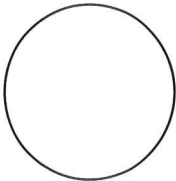
宋代の重要な「類書」である『太平御覧』は、それまでの歴史的文献を天文、地理、社会、生活などのカテゴリにおいてまとめている。その第1巻最初の「天部(一)」の第1項目は「元気」(Yuan Qi)

* 長崎総合科学大学 人間環境学部 助教授
2005年10月4日受付

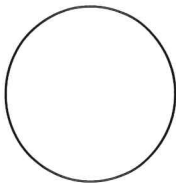
無極而太極



乾道成男



坤道成女



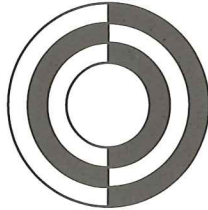
万物化生

a.周氏太極図

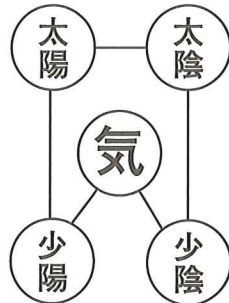
易有太極



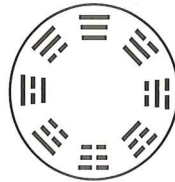
是分兩儀



兩儀生四象

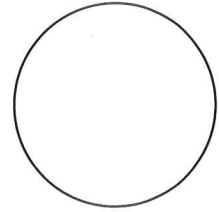


四象生八掛

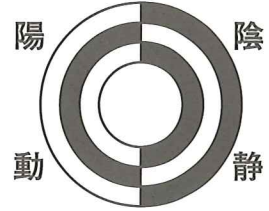


b.太極變卦図

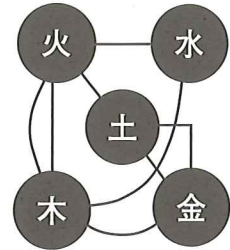
無極



太極



五行



華夷四洲



c.太極開關図

図2 天地万物の形成を説明する原理図

参考文献：a 馮友蘭『中国哲学史』, b 徐善繼『地理人子須知』, c 徐試可『地理天機會元』

が挙げられている。その分類の順からも、全カテゴリにおけるこの概念の重要性が見出せると考える。そこで、「元氣」(Yuan Qi) の概念によって天地万物の生成原理が説明される。以下の2点ばかり引用しておく(【 】の中の内容)。

【三五曆紀曰：未有天地之時，混沌狀如鷄子，溟滓始芽，濛鴻滋萌，歲在攝提，元氣肇始。又曰：清輕者上為天，濁重者下為地，沖和氣者為人。故天地含精，万物化生】つまり、天地ができる以前は、玉子のような混沌たる状態であり、この状態は「元氣」(Yuan Qi) という。そこで、軽いものが上り、天となり、重いものが沈み、地となり、調和したものは人間となる。したがって、天地には「精」(「元氣」という原動力) があり、それによって万物が生まれる。

【礼統曰：天地者，元氣之所生，万物之所自焉】つまり、天地は「元氣」(Yuan Qi) によるもので、万物の由来するところである。

これで分かるように、中国思想においては、天地万物を「氣」の原理によって捉える特徴がある。ここでは、宇宙や天地万物の由来について説明しようとしたものだが、説明の中に「氣の原理」の存在が見出される。このような「氣の原理」は「氣」の環境観でもあり、つまり「氣」を手段として環境認識をしようとし、環境の本質を「氣」と見なすものである。

もちろん、中国の歴史において、「環境」という概念の出現は「氣」の概念よりずっと遅く、『元史・余闕伝』に「環境築堡寨，選精甲外捍，而耕稼於中」という記述が早期の用例として見られる。しかし、「環境」概念の出現と関係なく、さきの天地についての説明は、環境についての説明でもある(図1)。

「氣」の本質については、歴史において「陰陽」、「五行」、「八卦」などの理論によって説明される(図2)。また、それは物質なのか、非物質なのかなどについての議論もあった。ここでは、これらについて深く議論せず、単純に、それを環境認識の「手段」と見なす。

氣の思想は天文、地理、医学、軍事、宗教など

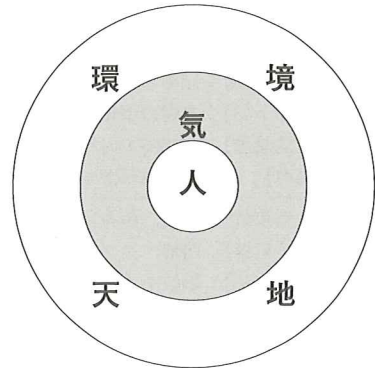


図1 人間と環境との間における「氣の原理」

の諸学及び生活の諸側面において見出され、風水説においても同様に、「氣」の理論的应用が見出される。有名な風水古典である『葬書』には風水の概念について、「氣は、風に当たると散り、水に遮られると止まる。古人はそれを集め、あるいは導いて蓄える」【氣，乘風則散，界水則止。古人聚之使不散，行之使有止。故謂之風水】と述べる。これで、「風水」の本質は「氣」を意味するものであることはわかる。『青囊經』という古典には、天地、人の三者の関係から「氣」の重要性が力説される⁶⁾。「氣」の原理に加え、風水説には「陰陽」、「五行」、「八卦」などの理論が歴史を通して融合され、特に「陰陽」の概念は「氣」の概念とはほぼ同じ意味において使われる。

風水説は地形や河川や道路や方位などの状況から、「氣」の状況を見極め、人間にとって悪い「氣」(凶氣)を避け、良い「氣」(吉氣、生氣)の有効利用を重要視する。具体的な取り組みには、多くの側面が絡み、理論体系が膨大であり、非科学的な部分も含まれている。ここではその詳細に触れることを省略する。

3. 陽宅風水にみる環境影響への対応

風水説において良い「氣」を求める目的は、良い環境を求めるにほかならない。良い環境があつてこそ、人間には健康と長寿と富と智慧などが生まれる。逆に、環境が悪いと、多くの弊害が生じ

表1 人間と諸側面に起こりうる被害

家族内の人間関係	【不孝】：親不孝であること 【兄弟不和】：兄弟の不和 【夫婦不和】：夫婦の不和 【内乱滅倫】：家族内での不倫関係 【風声】：淫らな行為ができること
男性に関すること	【酗酒致命】：大酒，命を落とすこと 【賭博犯禁】：賭博，タブーを犯すこと 【男子貪花】：娼妓を求めること
女性に関すること	【悍婦妬婦】：凶暴で，嫉妬心が強いこと 【出婦休婦】：離婚しがちであること 【醜婦拙婦】：容姿が醜く，不器用である 【内助得否】：良妻賢母になるかどうか
他人や社会との関係	【外人口角】：人に悪口をされること 【誣頼上門】：無実の罪を着せられること 【教唆悪極】：他人に悪い事を教唆すること 【官符常遭】：役所側に訴訟されること
家屋の被害	【人常招盜】：空巢の被害に遇うこと 【火焚】：火事に遇うこと
貧困と流浪	【流離播遷】：家族離散になること 【遊食他方】：流浪，乞食になること
その他	【奴僕班否】：召使いが勤勉でないこと 【雜人夥居】：様々な人が雑居になること

参考文献：(清) 魏清江『宅譜大成』

表2 環境対策の対象となる病気の種類

病気の類型	病名あるいは病気の症状
感染症	【瘟疫】：疫病 【痢疫】：赤痢 【胸喘哮喘】：風邪の症状 【痰火勞瘵】：結核
女性や小児の病気	【閉經不調】：生理不調 【崩漏】：妊娠中の出血 【陰蝕】：原虫や寄生虫による性感染症 【奶花乳癰】：乳腺炎 【孩無乳汁】：母乳が出ない 【搐筋慢驚】：小児の痙攣
内臓の病気	【痞塊池疽】：腹部にできるしこりや塊 【氣痛】：気の不通による内臓の痛み 【停滯食積】：消化不良 【膨脹水蠱】：腹水やお腹の張れ 【絞腸陰症】：腸の病気 【氣卵腎風】：脱腸や腎臓の病気
脳・神経と心の病気	【中風中痰】：脳卒中 【風疾】：精神病
目・耳・鼻・咽喉・口腔と歯の病気	【目】，【耳】，【鼻】 【喉病項疾】：喉や首の部分の病気 【哽噎】：嚥下困難 【啞啞】：口のできないこと 【口】，【唇】，【牙】，【舌】
皮膚の病気	【痘瘡】：皮膚にできる豆状の疱疹 【疥瘡癰疽】：皮膚病 【癬癩汚癢】：皮膚病 【怪瘡惡毒】：皮膚にできる病気 【手指怪疾】：指にできる病気 【臉面疾患】：顔にできる病気
運動器(骨・関節・筋など)の病気	【駝腰駝背】：猫背になること 【矮子脚短】：背が低く，脚が短い 【脚疼】：脚が痛い 【跣子跛子】：脚が不自由になること 【癱子腕扒】：寝たきりになること
その他	【体氣孤臭】：体臭が強いこと 【痔漏】：痔の病気 【瘦色贅疣】：首にできる疣，甲状腺腫 【弱症淋遺】：虚弱であること

参考文献：(清) 魏清江『宅譜大成』

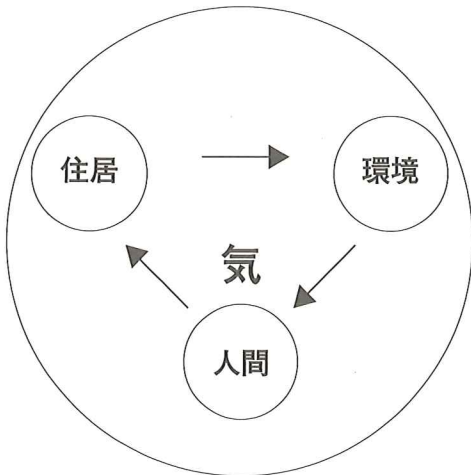


図3 人間と住居と環境との相関関係

る。このような考え方を明らかにするために、ここでは、風水説における「陽宅風水」の理論に着目し、住居についての基本的な考え方、また、環境影響についての考え方を考察する。

「陽宅」とは「住宅」、「住居」の意味で、「陽宅風水」は住宅計画に関する風水理論である。

重要な風水古典である『宅経』は住宅の本質について以下のような著述がある。

【宅者、乃是陰陽之枢紐、人倫之軌模】つまり、住宅は「陰陽」を宿るところであり、人倫の秩序と規範である。ここでいう「陰陽」はつまり「気」であり、住宅を通して人間や生活や社会規範などに影響を与える原動力と見なされる。

【凡人所居、無不在宅、雖只大小不等、陰陽有殊、縱然客居一室之中、亦有善惡。……犯者有災、鎮而禍止】人間は住居と切り離せない関係にある。住宅は様々にあり、「陰陽」の観点からみても状況が様々であるが、たとえ一室であっても善悪がある。慎重に計画しなければ、災いを蒙ることになる、という。これは、居住環境は無視できず、人間はその影響を受けることを指摘したものである。

【陽不独王以陰為徳、陰不独王以陽為徳、亦如冬以温暖為徳、夏以涼冷為徳】「陽」は単独にならず「陰」を「徳」とし、「陰」は単独にならず「陽」を「徳」とする。それは、冬は暖かいことを「徳」とし、夏は涼しいことを「徳」とするのと同じである、という。ここで、「陰陽」を得た居住環境は冬暖かく、夏涼しいというように具体的に説明される。これは環境的な説明である。

これで、住居の本質について「陰陽」(=「気」)から説明されることがわかる。

「陰陽」あるいは「気」の状態とは、人間が捉えた「環境」の状態である。風水説は良い居住環境を目指すために、良い「気」(「吉気」)を求めるのである。

居住環境が不備となり、悪い「気」(「凶気」)があると、どのような影響が出るのか。風水説はその影響を非常に重要視し、悪い影響を極端に回避しようとする。清代の重要風水書である『宅譜大成』は、悪い居住環境が個人に、社会に、また健康や育児などに与える不利な影響を指摘している(表1)。

そこで、不利な影響を避けるために、「気」を十分に配慮した計画が必要となる。計画方法についてはここで詳細に触れないこととするが、良い計画は、無病息災、繁栄と事業の成功などが期待される。特筆すべきは、「却病」(Que Bing 病気を退く意味)という考え方で、住居に良い「気」を得ることによって「病気」を予防あるいは治療する、ということである(表2)。

現代医学の考え方ではなかなか理解しがたいことであるが、『宅譜大成』は、居住環境の医療効果についてこのように位置づけている。

【神農嘗百草、医薬有方；黄帝問天師、調劑多術、乃亦有不瘳之疾。累代相招、闔門伝染者、母乃宅基感召、卦位干支有刑冲尅害之所致乎。陰陽氣化応出是病本先天、草木薬石医治是病在後天】つまり、いくら良薬があっても、治せない病気がある。病気は「先天」的なものがあり、それが「陰陽」の不調によるもので、住宅を通して人間に及ぼすものであると。

医学的な治療を排除しないが、風水説は、薬で治療しても根本的な改善にならず、環境に起因するような「病気」を突き止め、「気」に密接な関係をもつ居住環境の改善を通して、その発生を予防・治療するのである。このように、風水説は住居に着目し、人間存在にとっての居住環境の重要性を見出し、「気」の運用を通して、人間と環境との良い関係を結びつけようとしたのである。これは別の観点からみると、住居を通して人間と環境との対話を図ろうとすることが見出される。その結果、人間は住居において環境(風、光、空気など)と切り離されることなく、良い関係が成立するのである(図3)。

なお、ここでいう人間と環境との良い関係を目指す部分は「風水」の本来の目的であると考え、現実の風水応用において混入された迷信の部分は論外としたい。

4. 終わりに

以上の考察を通して、歴史的な考え方と方法には、人間と住居と環境とは緊密な関係にあることがわかる。風水説は「住居」においてその緊密な関係を図ろうとした。人間と環境との良い関係を築くことによって、健康や繁栄や社会の安定を図り、災害を回避しようとするのである。

過去に見られた「気」の思想は現代において、東洋医学や気効・武術などに残されているものの、学問全般においては矮小化する傾向にある。その有用性について、研究の必要性はあると考える。

指摘すべきなのは、今日の住宅づくりにおいて、環境への配慮の少なさである。居住密度と経済効果を求め、環境配慮の少ないアパートメントハウスが東洋の各都市に大量に出現し、自然の風通しの代わりに空調設備に依存する生活である。戸建て住宅も環境対話を工夫しない設計がある。エコハウスの試みが見られるが、まだ主流になっていない。人間と環境との疎遠は、このような居住の現実が少なからず影響をしているのではないかと考える。

住居は人間と環境を対話させ、人間と環境を結び役割がある。住居の教育力を軽視してはならない。

本稿では歴史的な考え方と方法に限定し、実際にある住宅とそこにある生活について触れていない。別の研究機会に深めたいと考える。

注

- (1) 日本政府は平成16年10月1日、「環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を施行した。
- (2) 筆者が「天井(Tian Jing)に見る共同空間の性格」(日本建築学会大会学術梗概集 1997)において、「天井」という中庭における生活(自然に触れる生活)についても考察している。
- (3) 中国の風水に関しては、デ・ホロート(牧尾良海訳)「中国の風水思想—古代地相術のパラード」があり、朝鮮の風水に関しては、村山智順

「朝鮮の風水」があり、日本沖縄の風水に関しては、渡邊欣雄「風水思想と東アジア」がある。

- (4) 風水に基づいた都市や村などは多くあり、代表的には中国の六大帝都が挙げられ、筆者が「中国六大帝都の風水評価に関する考察」(日本建築学会大会学術梗概集 1993)において明らかにしており、村に関しては、例えば筆者が「水系との関わりからみた集落の空間構造に関する研究—中国安徽省徽州集落事例研究」(神戸大学自然科学研究科紀要 10—B, 1992)において考察した中国安徽省徽州宏村は現在世界遺産に登録されている。
- (5) これについて、筆者が「風水説における理念の考察」(日本建築学会計画系論文集, 第456号, 115~121頁)において考察をした。

参考文献

- (1) (作者と年代不詳)『宅経』, (清)張海鵬 輯, 『学律討原』第九集, 上海商務印書館, 1922
- (2) (晋)郭璞 著『葬書』, (清)張海鵬 輯, 『学律討原』第九集, 上海商務印書館, 1922
- (3) (清)魏清江 著, 『宅譜大成』集文書局, 1985
- (4) (宋)李昉 他撰, 『太平御覧』(-), 中華書局出版, 1995, 1~6頁
- (5) 李桓, 「環境の意味—環境学へ向けて」, 長崎総合科学大学紀要, 第42巻, 第1・2合併号, 223~228頁, 2001年12月
- (6) 龐朴 編, 『中国儒学』第4巻, 東方出版中心, 1997, 131~135頁
- (7) 小野沢精一 他編, 『気の世界—中国における自然観と人間観の展開』東京大学出版会, 1981, i~viii頁